

## 研修成果（レポート）

### 【研修名】

国内研修

### 【論文題名】

上代文学における万葉集の位置づけ

### 【研修員】

文学部日本文学科教授 倉住 薫

### 【研修目的】

研修員はこれまで、柿本人麻呂を中心とした万葉集研究を行ってきた。柿本人麻呂は、万葉集の第二期に活躍した万葉歌人である。人麻呂は、万葉以前の古事記日本書紀に現れる記紀歌謡とも深くつながり、また万葉後期の歌人たちに強く影響を与えた歌人でもある。大妻女子大学に着任した2011年には、それまでの研究成果を『柿本人麻呂—ことばとこころの探求—』（笠間書院）として上梓することができた。

その後、柿本人麻呂作品を理解するためには周辺領域を深く理解することが必要であると考え、柿本人麻呂自身の作品のみならず、柿本人麻呂歌集や彼以前の初期万葉、人麻呂が深く関わったとされる巻十三や記紀歌謡、当時の時代状況が把握できる巻十六の作品、また万葉研究者である武田祐吉などに関して論文を発表してきた。

近年は、万葉集巻十六の注釈書を刊行するために、万葉集研究者と共同で注釈作業を行っている。こうした研究過程において、「上代」という時代への理解を深め、柿本人麻呂を中心とした万葉集の作品を研究していくことが次の課題となってきた。人麻呂がなぜ独創的な作品を生み出すことができたのかという問いを解決するためには、万葉集を内部からのみ見るのではなく、他の上代文学作品などの研究の基礎を学び、万葉集を相対化する視点が必要となった。

さらに、2020年度には本学所蔵の「嫁入本万葉集」をテーマとした戦略的個人研究費を獲得した。江戸期に成立したこの「嫁入本万葉集」は、平仮名本文・漢字別提訓という万葉集の写本において非常に希少な形式で書かれている。この「嫁入本万葉集」は、万葉集の写本・

本文研究や万葉集の受容の研究にも重要な視点をもたらすものであり、さらに研究を進めて、万葉集受容という大きな課題にも取り組んでいく必要がある。

研修先である國學院大學は、万葉集と同時代の歴史・文学を反映している古事記の、学際的・国際的研究拠点である古事記学センターをもち、古典籍を多く所蔵する図書館や博物館がある。最先端の古事記研究、また写本研究を学ぶことによって、上代文学における万葉集研究の新たな視座の獲得を目指した。

### 【研修内容・成果】

①國學院大學大学院の谷口雅博指導教授の「上代文学演習Ⅰ・Ⅱ」（金曜4限、前期・後期 全30回 参加者13名）の全回に参加した。

「上代文学演習Ⅰ・Ⅱ」では、古事記の演習発表が行われた。演習の対象場面は、古事記上巻の「大年神おほとしのかみの系譜」「天善比神あめのほひのかみと天若日子あめわかひこ」である。演習では、古事記の善本とされる真福寺本（応安4・5年〈1371・1372〉に僧・賢瑜によって書写）を底本とし、他の写本・版本によって本文校訂を行い訓読文を作成し、江戸期の『古

事記伝』（本居宣長著、1790～1822年刊行）以降の古事記や日本書紀に関する注釈書を用いて、注釈作業を行った。この演習の成果は、「古事記学」研究会編として、「『古事記』注釈（三十五）大年神の系譜、（三十六）葦原中国平定（一）」（『國學院大學研究開発推進機構紀要』15号、2023年3月、143～315頁）に【校訂本文】【校異】【訓読文】【現代語訳】【語釈】【補注】が公開されている。なお、『古事記』注釈の作成にあたっては、授業とは別に、國學院大學研究開発推進センター「國學院大學「古典文化学」の創出研究事業」の「古事記学」事業として、研究会と研究フォーラムがオンラインで開催され、そちらにも参加した。（研究会：7月29（金）、9月30日（金）、11月25日（金）いずれも18：00～19：30、研究フォーラム：題目「なぜ高千穂から始まるのか一天孫降臨神話の舞台裏」講師：飯泉健司（埼玉大学教育学部教授）、1月27日（金）17:00～18:30）

本文校訂では、一文字一文字をすべて、真福寺本全体の文字と照らし合わせ、古字書である『篆隸万象名義』『新撰字鏡』『類聚名義抄』や木簡資料の文字の使用状

況も含め、異体字や誤写などの判断を行う。訓読文は、古字書や木簡資料の他に、日本書紀の写本や仏典資料などの平安期の訓点資料を用い、作成を行う。本文・訓読文の校訂作業によって、古字書や木簡資料の活用、写本の調査方法などの、資料操作に関する力を習得することができた。

また、注釈の作成では、古事記と同時代の日本書紀や風土記といった、上代文献の日本神話の全体を捉え直すことへとつながった。各作品に登場する神名や用語を同一のものと捉えるべきか否か、など残された課題は多い。さらに、「言趣」「言向」（ことむけ—古事記において平定を行う際に用いられる用語・理念）の語の分析から、古事記は地上を「対話が成り立つ」世界として描いていることが明らかになった（『古事記』注釈（三十六）葦原中国平定」（一）【補注五】「言趣」「言向」担当：谷口雅博『國學院大學研究開発推進機構紀要』15号、2023年3月）。また「復奏」（かへりごと—天照大御神に対する報告）が、「君臣関係を明示し、そのあるべき姿を語る役割を有した」語であることが明確となった（『古事記』注釈（三十六）葦原中国平定」（一）【補

注六】『古事記』の「復奏」(覆奏)担当：小野諒巳『國學院大學研究開発推進機構紀要』15号、2023年3月)。

古事記の用語の分析は、その語の意味の定義だけではなく、古事記全体の世界観を明らかにすることへとつながる古事記研究にとって非常に重要なものである。この注釈事業は、古事記全巻を予定しており、今後も『國學院大學研究開発推進機構紀要』に掲載され、國學院大學「古典文化学」事業の中で公開される見込みである。

( <http://kojiki.kokugakuin.ac.jp/research/> )

②谷口雅博指導教授の「論文指導演習」(金曜5限、前期・後期 全30回 参加者14名)の全回に参加した。

「論文指導演習」では、参加者の研究テーマに関する発表が行われた。研修者は、2回発表を行った。

第1回：10月21日の発表では、万葉集の「風」について考察を行った。万葉集において「風」は一九〇首を超える例があり、多様な表現性を有している。万葉集の「風」に関する代表的な先行研究としては、川村孝次郎

「万葉集の風」(「美夫君志」二八、一九八四年三月)、  
戸谷高明「万葉の景物 風」(「早稲田大学教育学部学術  
研究 人文科学・社会科学篇」一五(一九六八年三  
月)、後に『万葉景物論』(新典社、二〇〇〇年十二月)  
所収)があり、時代ごと・作者ごとの傾向や「秋風」と  
いう語の定着について論じられてきた。

研修者は、「風」の表現性の展開について論じた。万  
葉集において「風」は、「神風」のように神が操り、人  
の力を超えるものと捉えられている。「風の音」「風の  
声」も詠まれ、目にはみえないが、耳で聞き、触れるこ  
とのできる景物として認識されていた。「風」は、「波」  
「袖」「花」などの他の景物に作用し、動きのある情景  
を描き出す。また、冷たく、微かに触れることはできて  
もすぐに居なくなってしまう「風」は、旅の歌におい  
て、待ち人のこないもどかしさ、独り寝の空虚さを呼び  
起こす景物でもある。こうした相手の不在を知らしめる  
「風」は、額田王と鏡王女の歌(巻四・四八八、四八九  
番歌)において、思い人の来訪を告げるものとして詠ま  
れ、柿本人麻呂歌集歌においては、他者に認識できない  
二人だけの逢瀬が「風」として象徴され(二六四五番

歌)、独り寝のまま迎えた朝に「我」と「妹」との  
「風」による逢瀬を願うものでもあった(二八五八番  
歌)ことを明らかにした。質疑応答では、「寄物陳思」  
(物に寄せて思いを陳べるという万葉歌の表現形式)に  
おける「風」の特異性が明確となった。後に、人麻呂歌  
集「寄物陳思」歌である二八五八番歌を中心として、國  
學院大學国文学会にて発表を行った(【研修内容・成  
果】③で詳述)。

第2回：二回目の発表は「「橘」に寄せる恋一人麻呂  
歌集二四八九番歌の解釈一」という題目で、1月13日  
に行った。

万葉集卷十一「寄物陳思」には、以下の柿本人麻呂歌  
集略体歌が収載されている。

橘たちばなの 本我立もとに 下枝取しづえとり 成哉君ならむやきみと 問子等とひしこらほも

(二四八九番歌)

二四八九番歌の第二句「我立」には、複数の訓読「ワ  
レタチ」「ワヲタテ」「ワガタチ」などが提唱されてい  
る。また「我」を単数とみるか複数とみるか、「我」を  
詠み手とするか「子」とするかなど解釈も異なるが、人  
麻呂歌集の文字使用の状況からは、「我」は「我」と



「子」の複数と理解するのが妥当である。すなわち、橋の木の本に二人で並び立ち、下枝を手に取り「成らむや、君」と問いかけた「子」を追憶する歌である。

二四八九番歌で詠まれる「橋」は、「餌<sup>え</sup>香<sup>か</sup>市<sup>いち</sup>邊<sup>のへ</sup>の橋の本の土」(雄略紀十三年三月)ともあり、交通の要所・人の交流の場である「市」に街路樹として植えられていたと考えられる。こうした「橋」の木陰は、逢瀬の思い出を彩る景物となる。二四八九番歌において、「橋」の「下枝」が今後「成らむや」(実るだろうか)と問うのは、二人の恋の行方を尋ねることを意味し、逢瀬の場である「橋の本」で恋の成就に不安を覚える「子」の姿を描き出すのである。

二四八九番歌は、二四八四番歌から続く「木に寄せる」歌の最後の六首目にあたる。六首は連作ではないが、人麻呂歌集の「寄物陳思」として一つのまとまりをもつ。「待つ」ことを約束し二人で植えた「松」(二四八四番歌)、別れの姿を隠す「松」(二四八五番歌)、根を深く張る「松」と強い恋情(二四八六番歌)、「小松が末<sup>うれ</sup>」のようなどうしようもない思い(二四八七番歌)、「ねむの木」のような「ねもころに」思い始めた熱情、

「橘」の木の本での恋の記憶（二四八九番歌）という、「木」の性質に合わせてさまざまな恋の想いを詠んだ「寄物陳思」の六首と位置づけた。質疑応答において、六首の「寄物陳思」としての特質が論点となった。人麻呂歌集においては、景物の細かな特質を精確に捉えることで、細やかな恋の心情を詠むことが可能となっていることを明確化し、質疑応答での論点を踏まえ、以下の論文を執筆し公開した。「「橘」に寄せる恋一人麻呂歌集二四八九番歌の解釈一」（『大妻国文』54号、1～21頁、2023年3月）

③令和四年度 國學院大學国文学会秋季大会における発表

日時：11月20日（日）13：00～16：30

会場：國學院大學120周年記念2号館2101教室 ハイブリッド開催

題目：「「寝ねぬ朝に吹く風」の訪れ一人麻呂歌集二八五八番歌の特質一」

【研修内容・成果】②Ⅱでの、万葉集における「風」の表現性についての口頭発表を端緒として、人麻呂歌集

「寄物陳思」の以下の歌を取り上げて論じた。

妹戀<sup>いもにこひ</sup> 不寐朝<sup>いねぬあしたに</sup> 吹風<sup>ふくかぜは</sup> 妹触者 吾与経

(⑫ 二八五八番歌)

二八五八番歌は「妹に恋ひ寝ねぬ朝に吹く風」という、いとしい女性に恋い焦れ眠れないまま迎えた朝に吹く風が詠まれる。妹に触れた風が、詠み手である我に触れてほしい、つまり、独り寝のまま夜を明かした我のもとへの風の訪れを願う「風に寄せる」歌である。二八五八番歌は、人麻呂歌集に特有の助字が書かれない、いわゆる略体歌であり、二重傍線部の第五句には本文に異同もあるため、第四句以降には複数の訓読が提唱されている。第五句は、人麻呂歌集の文字使用・訓み添えの法則から「吾と触れなむ」の訓みが適切であり、いとしい人を恋しく思い寝ずに迎えた朝に風の訪れを願う、風に寄せて恋の思いを陳べる歌と解釈できる。

二八五八番歌は「風」を自分の力の及ばないものとして、せめて触れて欲しいと願う歌であり、男性が「妹」のもとへ訪れる妻問を基盤とした万葉集の相聞歌において、異質とも言える。〈間接的な逢瀬〉の願いを「風」に託すという発想は、万葉集の「寄物陳思」の表現形式

を考える上で非常に重要な視点となる。「風」は見えないものであり、万葉集においては、他の景物との取り合わせや、他の対象を動かす可視化された「風」が詠まれる。だが、「寄物陳思」では、「風」は、強く吹く様子が恋の障害として詠まれ、自分に吹くあるいは吹かない「風」は、相手からの思いの表象として詠まれ、可視化されていない。ただ「吾」に触れ、「吾」が感じる「風」が詠まれる。「吾」である自分自身の思いを陳べる「風」、自分だけが感じる「風」が詠まれるのである。

二八五八番歌においては、「吹く風」によって「吾」に独り寝の物思いを気づかせ、同時に、「吾」と同じにいる「妹」の姿を浮かび上がらせる。「風」が、独り寝のまま「朝」を迎えたという状況と、物思いに沈む「吾」の姿とかつ同じ思いを抱えているであろう「妹」の姿を叙述するのである。こうした、他者の認識によらない可視化されない「風」は、景物に寄せて思いを陳べるという「寄物陳思」の表現形式によって獲得された表現であることを論じた。

質疑応答において、「正述心緒」(直接的に思いを述べ

るという万葉歌の表現形式)と比較した際の「寄物陳思」の歌としての特質が議論となった。

景物を介して〈おもい〉を陳べる「寄物陳思」と直接的に心を詠む「正述心緒」は、万葉集における表現形式上の分類である。しかしながら「寄物陳思」と「正述心緒」は、内容上も表現形式としても類似性をもつ歌もあり、その区別は必ずしも明確ではない。「風」という景物の分析は、万葉集における「寄物陳思」と「正述心緒」の表現形式を捉え直すために重要な視点となるものと評価された。

質疑応答を踏まえ、「寄物陳思」と「正述心緒」において詠まれる景物を検証すると、今回取り上げた「風」と「神」とは、「寄物陳思」だけに詠まれることが確認できた。「風」と「神」とは、目に見えず、自己にしか認識し得ない景物であるという共通性を有する。自己認識による景物によって心を描くのが「寄物陳思」の特質として位置づけられることを考察し論文として発表した。『上代文学研究論集』第7号、1～15頁、2023年3月)

④書評：和田明美著『古代日本語と万葉集の表象』（汲古書院 2022年3月10日 三六四頁） 執筆

古代日本語の研究者である和田明美による「万葉集の歌の表象を考究」した『古代日本語と万葉集の表象』の書評を執筆した。「古代日本の歴史や社会制度を視野に入れつつ、古代日本語の表現が内包する思考や認識、言語表現が具象化しシンボライズする「表象」の把握を目指した」（あとがき）和田は、古代日本語の構文や文法を精緻に分析し、その表現が「やまと歌」のことばとして、どのように「古代的思考や歴史に裏打ち」されているかを論じており、大きく分けて第一章・第二章の地域に根ざした研究、第三章の日本語学的考察を行っている。第一章・第二章は、地域性を活かした越境の視点からの論、第三章は、和田のこれまでの日本語学的研究方法を基盤とする論である。近年「数量的データ分析」などによる文法・語法研究が盛んに行われ成果を上げている。だが、古代日本語とりわけ歌を、「精確に読み」「思惟や感情を読み解く」（序）には、歌表現を支える当時の社会背景・意識・文化を視野に入れ考察することが重要である。和田の論は、研究手法の〈クロスボーダー〉

の意義をも再認識させるものであると論じ、以下に掲載した。『日本文学』第72巻1号、68・69頁、2023年1月)

⑤「大妻女子大学図書館蔵『嫁入本万葉集』一翻刻：巻二・三一」（『大妻女子大学紀要一文系一』第55号、1～47頁、2023年3月）執筆

大妻女子大学図書館蔵『嫁入本万葉集』（以下、大妻本）の巻二・三の翻刻を公開した。大妻本は、平仮名本文に漢字を傍書する形式で書かれている。江戸期に高貴な女性の嫁入道具として流通した万葉集の「嫁入本」は、その多くが漢字本文に片仮名傍訓あるいは平仮名傍訓の形式で書かれている。また、「嫁入本」以外の万葉集の写本においても大妻本のような平仮名本文・漢字傍書の形式は、非常に希少である。大妻本の詳しい書誌情報はすでに「大妻女子大学図書館蔵「嫁入本万葉集」の書誌学的考察」（「人間生活文化研究」（International Journal of Human Culture Studies）No.31、2021年）で論じた。また巻一の翻刻は『大妻女子大学紀要一文系一』第54号、1～15頁、2022年3月）に掲載済みであ

る。大妻本二十巻のうち、巻三までの翻刻を終えた。これまでの調査によって、大妻本の底本が江戸期の注釈書であった可能性が高まってきた。今後も、翻刻を進め、底本を特定し、近世期における万葉集の受容のありようを明らかにしていきたい。

#### ⑥2020年度上代文学会大会への参加

日時：5月21日（土）、22日（日）

会場：21日－信州大学教育学部（長野（教育）キャンパス）にて参加、22日－Zoomにて参加

21日は、新潟経営大学准教授である西澤一光氏による「契沖『万葉代匠記』の解釈学をめぐって」と信州大学名誉教授である渡辺秀夫氏による「和漢比較研究の小径（ささやかなあゆみ）」の講演があった。西澤氏の講演は、近世期において万葉集研究がどのように捉えられ展開していったのかという、万葉集の受容に関するものであった。渡辺氏の講演は、万葉集だけでなく、平安初期に誕生した竹取物語まで視野を広げ、漢文学が日本文学に与えた影響と受容とを論じるものであった。両者の講演ともに、研修者の、万葉集がどのように受容され、万



葉集は他の文学をどのように受容したのか、という問題意識とつながるものであった。

#### ⑦伊勢神宮外宮の見学調査

日時：2月10日（金）

場所：伊勢神宮外宮（三重県伊勢市豊川町279）とその周辺

伊勢神宮外宮（豊受大神宮）は、内宮の天照大御神のお食事を司る御饌都神である豊<sup>と</sup>受<sup>うけ</sup>大神を祀る。豊受大神は、衣食住、産業の守り神ともされ、古代における伊勢信仰のありようについて調査を行った。神宮徴古館農業館では、伊勢神宮の建築様式や古代に行われていた農耕について学んだ。伊勢神宮内宮の別宮である倭姫宮を踏査した。倭姫命は天照大神を祀る宮として伊勢神宮を創建し、祭祀や神職の制度を定めたとされる、初代「齋宮」とも称される人物である。倭姫を祀る宮で、当時の都である明日香との位置関係や「齋宮」の始原について踏査を行った。伊勢神宮外宮とその周辺施設・地域を踏査することで、伊勢信仰・天照大御神信仰について理解が深まった。天照大御神を祀る伊勢神宮内宮でも今後調

査を行う予定である。

#### ⑧万葉集関連地域の見学調査

日時：2月24日（金）

場所：室生寺（奈良県宇陀市室生78）

室生寺の金堂・本殿・奥の院・宝物殿の見学調査を行った。天武天皇の勅命によって建立されたと言われる室生寺を踏査し、古代の水神信仰のありようや、中世期以降の密教、江戸期の女人高野について理解を深めた。室生寺は交通の便が悪いため、これまで行く機会がなかったが、時間的余裕の生まれる研修期間であったため踏査を行うことができた。

#### 【研修期間中の研究業績】

学会での口頭発表

1：「「寝ねぬ朝に吹く風」の訪れ一人麻呂歌集二八五八番歌の特質―」令和四年度 國學院大學国文学会秋季大会

日時：11月20日（日）13：00～16：30

会場：國學院大學120周年記念2号館2101教室 ハイ

## ブリッド開催

### 研究論文 単著

- 1 「大妻女子大学図書館蔵『嫁入本万葉集』一翻刻：巻二・三一」（『大妻女子大学紀要一文系一』第55号、1～47頁、2023年3月）
- 2 「「橘」に寄せる恋一人麻呂歌集二四八九番歌の解釈一」（『大妻国文』54号、1～21頁、2023年3月）
- 3 「「寝ねぬ朝に吹く風」の訪れ一人麻呂歌集二八五八番歌の特質一」（『上代文学研究論集』第7号、1～15頁、2023年3月）

### 書評

- 1 和田明美著『古代日本語と万葉集の表象』（汲古書院2022年3月10日 三六四頁）『日本文学』第72巻1号、68・69頁、2023年1月）

### 注釈 共同

- 1 「『古事記』注釈（三十五）大年神の系譜、（三十六）葦原中国平定（一）」（『國學院大學研究開発推進

機構紀要』15号、2023年3月、143～315頁、指導教  
員：谷口雅博、参加者：稲見知華・孟金岳・梅山奈都  
海・菅健一郎・村井優里・鈴木貴大・小野寺紗英・藤島  
健太・鶉橋辰也・小野諒巳・倉住薫）

### 【総括】

研修員は、國學院大學の谷口雅博教授のもとで、上代  
文学における万葉集の位置づけを明確にするため、上代  
文学の文献学的研究手法を1年間学んだ。

【研修内容・成果】の①では、古事記・日本書紀・風  
土記の日本神話の解釈にあたって、古字書・木簡資料・  
漢籍・仏典資料などの古典籍の収集や調査、活用方法を  
学んだ。加えて、上代の散文作品全体を見通したこと  
で、万葉集に詠まれる日本神話を相対的に捉え直す視点  
を獲得することができた。

②では、大学院生や若手研究者との研究発表を通し  
て、最先端の上代文学の研究テーマ、研究方法を学ぶこ  
とができた。コロナ禍の影響で、近年の学会活動は大部  
分がオンラインでの開催となり、研究者同士の人的交流  
が滞っていた。研修期間中は、対面で研究活動を行うこ

とができたため、オンラインでは叶わなかった細やかな議論を行うことができた。定期的に活動を継続することで、その場限りではなく、問題意識を持続的に共有することが可能となった。対面での活動は、何ものにも代えがたい知的刺激があり、研究は一人ではできないと再認識した期間でもある。今回交流した研究者とともに、研究会を続けていく予定である。

また、研修員自身の研究発表においては、第1回目は万葉集における「風」の表現性について考察、第2回目は人麻呂歌集「寄物陳思」歌の「橘」の考察を行った。「風」の表現性は、議論を通して人麻呂歌集「寄物陳思」歌の「風」の特質を見いだし、【研修内容・成果】の③の学会発表と研究論文へとつながった。「橘」の研究発表によっては、研究論文の執筆へとつながった。

2度の研究発表、学会発表、2本の研究論文、書評の執筆を通して、柿本人麻呂歌集「寄物陳思」の特質という新たな研究テーマを見いだすことができた。万葉集において思いのありようを「物」に寄せて陳べる「寄物陳思」は、心を直接的に述べる「正述心緒」と対比的な表

現様式である。鈴木日出男による指摘の〈心物対応構造〉によって捉えることができる表現様式である（『古代和歌史論』東京大学出版会，1990年1月）。〈思〉と〈物〉との対応によって「新たなイメージ」を「構築」するため、「寄物陳思」においては、景物の分析が歌の解釈にとって重要な意味をもつ。研究テーマとした「風」の歌（二八五八番歌）と「橘」の歌（二四八九番歌）は、両者とも、訓読が定まっておらず、解釈も一定ではなかった。訓読の決定については、諸写本の性質と古代の助詞・助動詞の法則を理解することが重要であったため、【研修内容・成果】の①での知識と④の書評を執筆する際に学んだ古代文法についての知識が役立った。

「風」の歌は従来、二人の過去の逢瀬の記憶を歌う歌であり、「橘」の歌は、女性が男性に恋の成就を強く迫った歌と捉えられていた。だが、「風」と「橘」との分析からは、「風」の歌は独り寝のまま迎えた朝の〈今〉に女性との「風」による逢瀬を願う歌であり、「橘」の歌は不安定な恋の成就を切に願う女性の歌であることが明らかとなった。目に見えない「風」、逢瀬の場となる

「橘」という景物の特性を精確に捉えると、歌には新たな解釈が生まれるのである。また、「寄物陳思」と「正述心緒」はその類似性も指摘されるが、景物を分析したところ「風」と「神」のみは、「寄物陳思」にしか詠まれないことが確認できた。「風」と「神」は、詠み手にしか認識できない景物であることが共通し、「物」と「心」の対応について示唆的である。

こうした景物の分析を積み重ねることで、「寄物陳思」の特質、また「正述心緒」との関係も明らかになるだろう。表現形式は、万葉集のみならず、和歌史においても重要な視点であり、今後は古代和歌全般を見通す研究へとつなげていきたい。

さらに、研修員が近年取り組んでいる大妻女子大学図書館蔵「嫁入本万葉集」の研究も進めることができた。

【研修内容・成果】①で学んだ古典籍についての調査手法をもとに、万葉集の写本研究や江戸期における万葉集の受容のあり方についての視座を得ることができた。大妻本の調査や翻刻をさらに進めながら、万葉集の江戸期における受容については、研究資金を獲得し恒常的に研究を続けていくことを目指したい。

以上のような研修で得た成果は、学部の担当である「上代文学講義」「上代文学演習」「卒業論文ゼミ」などにおいても、最先端の研究状況や方法を伝え生かすことができると考えている。

研修中に得た知識や視点や人的交流を、今後の研究活動に生かし、万葉集研究の発展に寄与していきたい。

【研修機関名】國學院大學文学部・國學院大學大学院文学研究科（東京都渋谷区）

【期間】2022年4月1日～2023年3月31日

【指導教授名】谷口 雅博